六・七月に於ける「觀察」

堀　七　藏

一

六月から七月にかけて幼兒に觀察させるべきものはいろ〳〵數が多いのであります。先づ植物では花菖蒲、たけのこなどは五月に觀察させたならば兎に角是非觀察させねばなりません。粘土細工と連絡するもよく竹の葉でお池の遊びをなさしめるもよいのであります。花菖蒲は幼兒が畫くことは困難でありますが造花をこしらへさせるもよいのであります。また葉で菖蒲の笛をこしらへさせるもよいと思ひます。幼兒には一寸六ケしいが麥笛も椿の葉で笛をつくらせるもよいでせう。しかし麥を無暗とちぎつたり麥畑をあらすやうなことは面白くありません。農村などの幼稚園では麥や稻を觀察させることも至極結構でありませう。田植の有樣から苗の成長することも注意させ是等の有樣を幼兒が繪に發表するやうに導くことがよいと思ひます。

それで農村ではあざみ、ねぎ、しやくやく等を觀察させるも結構、また路傍の雜草をいろ〳〵と觀察させることは尙ほ適切だと思ひます。きんぽうげでもよめなでもよもぎでもいろ〳〵のものゝ名稱のあ

てつこをさせるのであります。またれんげ草の果實を觀察させるもよくくろばの四つ葉をさがさせるもよいと思ひます。こんな場合にはいろ〳〵の競爭をさせるがよいのであります。一番小さい葉のもの、一番大きな葉のもの、また一等圓い葉のものとか一等細い葉のものとかまたぎざ〳〵の澤山ある葉とかいふやうに葉で競爭させるも面白いし、また赤い花の咲いてゐるもの、黃い花とか紫色の花とか大きな花とか小さい花とかで競爭させるもよいと思ひます。それから路傍や畑などにある草花や樹木などの名前のあてつこをさせるも面白いのであります。何れ幼兒のことですから特殊なものや珍奇なものゝ名稱は知つてゐる筈もなく知らなくてもよいが、極く有ふれた植物の名前は知つてゐてもよいのであります。それは觀念と名稱とを結付けることを主眼とすべきこと勿論で六ヶしい程度の高い知識を授ける精神ではありません。またこの際發音練習をなしたり數觀念の涵養に留意せねばなりません。八つでの葉がいくつになつてゐるか、紅葉の葉がいくつに分れてゐるか、また花菖蒲や百合の花辨が幾枚あるか等と機會ある毎に事物を數へしめて數觀念の養成を心掛けねばならないのであります。

それで六月から七月にかけて觀察させるとよい植物は澤山あります。何でなければならぬと强制的に觀察せしめねばならぬことはありませんから幼稚園の周圍にある草花や樹木を材料として觀察させるのであります。

柿の花、栗の花、なでしこ、スウエートピー、しやくやく、ばら、けし、あぢさゐ、はるしやぎく、

ダリヤ、カンナ、月見草等どれでも觀察させることの出來るものを選定して觀察させるがよいのであります。

二

六月から七月にかけて觀察させるとよい果物類が相當多くあります。櫻桃も、枇杷も觀察させるには至極よい材料であります。單に一個の櫻桃や枇杷を遙拜させるのではなく成るべく幼兒に一個乃至數個與へて寫生させるもよいし、また食はせるもよく、粘土で製作させるもよいのであります。食はせたならば種子も觀察させるのであります。梅は食はせないがよいがこれも觀察させるがよく夏蜜柑、水蜜、いちご等を觀察させるがよいのであります。更にきうりでも、なすでも、またうり類等も觀察させるがよいのであります。是等は觀察と作業と連絡せねばならずまた數觀念の養成に利用すべきものであります。そして成るべく比較して相異點を明白にさせることが肝要であります。夏蜜柑ならば普通の蜜柑と比較するとか蜜柑と水蜜とを比較するがよく、梅の果實と櫻桃や水蜜などと比較するがよく、枇杷と梅の實、きうりとなすなどゝそれ〴〵比較させるがよいのであります。實物で比較するかせい〴〵觀念で比較するのであります。概念的な知識を授けたり抽象させることを目的とするのではありません。また幼兒のことでありますから事物の觀念を明白になすことが主眼であります。

三

六月から七月にかけて動物の觀察には牛、馬、犬、猫、雞、鶩、鳩、燕、雀等の獸類鳥類を成るべく機會ある毎に觀察させるがよいのであります。牛でも馬でも仕事をしてゐる有樣を主として觀察させるがよいのであります。牛や馬の掛圖などを用ひて說明するが如きことを要求するのではありません。町では荷車をひく牛馬、農村では田を耕す所でも牧場にゐる牛馬でもよいのであります。室內で繪本や掛圖で牛馬でも、犬猫でもまた雞鳩鶩の如きでも說明するが如きことは眞の觀察ではありません。春から夏にかけてよく見る小鳥などを觀察させる爲に小鳥の掛圖を示すとか繪本を見せるのはよいが、それは實物觀察の方便で觀察そのものではありません。繪本にある小鳥の中どれが來たが、今庭に來てゐる鳥が繪本のどの鳥か判別させるための方便であります。

それから六月から七月にかけてはみゝずでもぐらでもまたけらでもかへるでも更にかたつむり、たにし、はまぐり、さゞゑ、にな等の貝類を觀察させることが出來れば是非觀察させねばなりません。一々の物について詳細な事項を觀察させることよりも多くの物を廣く淺く視察させて事物の觀念を明白にすることを努めねばなりません。それでふな、めだか、か、かめ、かげろう、かひこ、くも、とんぼ等いろ〳〵の魚類爬虫類昆虫類等を出來るだけ多種多樣に觀察させるがよいのであります。尤もその中に特に幼兒が好む動物について祥細な觀察を行はせることは至極結構であります。幼兒のいやがるものを無理に觀察させることもまた幼兒が動物を踏殺したり棒で打つたりする殘忍な行爲をさせることも特に

注意してさけねばなりません。幼兒のいやがる毛虫を無理に觀察させやうとすることは却つて教育的ではありません。また幼兒がとんぼの翅をむしりみゝずやへびに石を投つけることをして快となすが如き行動を成るべく禁止すべきものであります。兎角動物愛護よりも小動物を殺したりいろ〳〵にいぢめることに興味をもつ時代の幼兒でありますから特別な注意を拂ふ必要があります。動物愛護の精神を説明しても養成出來るものでもなく動物と人生との關係を理解せしめてなどと工夫してもそれは駄目であります。動物を殺したものがあればその際動物の苦しむ有樣を見せて可愛想であるといふ念慮を起させる方が有効であります。

四

六月から七月にかけては梅雨で雨の降る日も多いと思はれるが氣象的事項の觀察をさせるには格恰であります。雲の變化、雨の降る有樣、雨水の流れる模樣、お池で水の遊び、お舟をつくり、お舟遊び、是等は幼兒には至極面白い觀察であります。水遊びは兎角どこの幼稚園でも家庭でも着物を濕らしそこらを汚すので誠に厭惡せられる所でありますが幼兒にとつてはこの上もなき面白い遊びであります。本能的に水遊びを好むのでありまた水を材料とした觀察をなすのであるから幼稚園では出來るだけ水を材料とした遊びと觀察を行はせる工夫がこの六七月に行はるべきであります。小川で水遊びをさせることが出來れば申分がないし、お池をつくつていろ〳〵の水遊をさせることが出來ると申分がありません。

このときお舟でもポンプでも噴水でもいろ〳〵の玩具を利用することが出來ると至極結構であります。幼兒の着物も一寸ぬれても困らぬやうに防水性の上被を利用する位な工夫があるもよいと考へます。

五

六月から七月にかけて幼兒に興味のある社會的行事は少いのでありますが幸に七夕祭があります。これを利用していろ〳〵のものをつくらせまた觀察させる方がよいと思ひます。風車をつくらせるもよいしいろ〳〵の車や乘物などを觀察させるとよいと思はれます。また夏季休業になりますからいろ〳〵の注意を說明するのではなく體驗させる工夫がよいと思はれます。生でたべていけない果物はどれかのんでいけないやうなものは何か蚊や蠅についてどういふ風に注意すべきか等は觀察によつて成程と感得させることが必要であります。幼兒のことでありますからいろ〳〵の說明では一向に役立たぬ知識にすぎません。

宵闇に浮かめる森や木の芽時　　盧子